〔吾妻鏡四十三〕建長五年十二月卅日甲戌、正朔御行始供奉人事、取集所著置于筵上座席之札、注其交名申下御點被相催云云、

〔三省錄四附言〕明和九年大火のとき、江戸中うりありきたる文に、

大火事の節、相場あらまし、○略中

一むしろ同○百文二貳枚

〔類聚名物考調度四〕もみぢむしろ　紅葉筵

紅葉の散敷たるを筵の如く見なしたる也稻筵とその意同じ、霧の色霧の海などもいひしがごとし、

〔後撰和歌集十九羇旅〕だいしらず　亭子院御製

草枕もみぢむしろにかへたらば心をくだくものならましや

〔雅筵醉狂集春〕月花

春の夜のおぼろ月夜にしくものは端ゐして見る花むしろのみ

自注、新古今集、大江千里、てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき、花むしろとは、花の散て席をしきたるやう也、またうつくしき席をもいふ、

〔類聚名物考調度四〕苔筵　こけむしろ

これはまことの筵にはあらで、苔の青々となめらかに生たるが、毯か筵をきたるさまに似たれば、かりて筵とはいふなり、また田舍あるは旅行などに、あやしのはにふの小室にとまるうへにてはよし、まことの枕筵にもせよ、つよくわびしきさまをいはんとては、草枕苔筵などもいへり、ことによりいひなしにもよるべきものなり、

〔夫木和歌抄四花〕嘉應元年成範卿家歌合羇中落花　皇太后宮大夫俊成卿